

# 保育者を目指す女子大生のコミュニティの所属意識 ーコミュニティ感覚と所属意識との関係ー

大鐘 啓伸<sup>1</sup>・大鐘 要<sup>2</sup>

(1: 東海学院大学人間関係学部心理学科, 2: 名古屋女子大学文学部児童教育学科)

## 要 約

地域で果たしてきた保育などの支え合いというコミュニティ機能が希薄化しているなか、地域子育て支援は公的制度によって取り組まれている。この制度において保育者の役割は重要である。本研究では、保育者を目指す女子大生 484 名にコミュニティの所属意識やコミュニティ感覚を調査し、地域子育て支援の促進に向けた保育者養成について考察した。コミュニティの所属意識は、数量化Ⅲ類およびクラスター分析によって、「仲間的コミュニティ」(36.2%)、「日常的コミュニティ」(60.5%)、「ボランティアコミュニティ」(2.8%)、「インターネットコミュニティ」(0.5%)にカテゴリー化された。コミュニティ感覚は、社会システムである「日常的コミュニティ」(M=12.18, SD=1.97)よりも、個人の共通の関心や信頼感の共有の心理的場である「仲間的コミュニティ」(M=13.05, SD=1.81)が有意に高かった。このことから、今後、保育者を目指すものは子育てをめぐるコミュニティに多く参加することが必要であると考えられた。コミュニティ活動の経験を通して、地域子育て支援に対するコミュニティ感覚を高めていくことである。そのことで、地域への積極的な関わり、貢献、働きかけといった行動に関連した社会的アイデンティティが形成されると考えられる。

キーワード: コミュニティ感覚、社会的アイデンティティ、子育て支援、関係的コミュニティ、機能的コミュニティ

(2019.9.12 受稿 査読審査を経て 2019.11.15 受理)

## 問題意識と目的

### コミュニティによる支援の課題

厚生労働省(2017)は、地域の人と人のつながりが弱まり、地域への帰属意識が低下するなど、地域社会の脆弱化が進んできていることを指摘している。そして、そのような社会構造において、従来、家庭や地域が果たしてきた介護や保育などの支え合いの機能を代替するため、公的な支援制度の整備が取り組まれている(厚生労働省,2016)。今日では、公的制度が生活を支える中心的な役割を担っている(厚生労働省,2016)。相談支援の例であれば、高齢者が地域包括支援センター、障害者が障害者相談支援事業、子育て世帯が地域子育て支援拠点事業と対応している(厚生労働省,2016)。

公的支援制度が整備されているなか、安藤(2002)は、コミュニティの解体という問題に加え、様々な心理社会的問題があることを指摘している。内閣府(2018)においては、子育てしやすい社会の実現に向けての地域社会における取り組みとして、子育ての孤立感やストレスの増

幅に対応することを示している。つまり、公的制度には、コミュニティによる支援の再構築とそこにある個々人の心理社会的問題への対応を合わせて整備していくことが求められているのである。

子育て支援における心理的要因とコミュニティとの関係については、大鐘(2010)が、児童センターで実施した子育て支援のワークショップの効果を、保護者の自尊感情、育児不安、コミュニティ感覚(sense of community)から調査している。この調査では、子育て家庭の身近なところに親子で気軽に集える場があることで、子育て中の親同士がコミュニティとしての支えあいを促し、育児の不安感を低減させ、自尊心を高めていくと報告している(大鐘,2010)。子育て支援に向けたコミュニティの再構築のために、コミュニティ感覚が重要な心理的要因であることがうかがわれる。

### コミュニティ感覚に関する研究

コミュニティ感覚とは、Sarason(1974)が「コミュニ

ティに対して人々が持つ態度」に対して命名したものである。Sarason(1974)は、コミュニティについて「人々が依存でき、たやすく利用可能で、互いに支援的関係のネットワーク」と定義するとともに「コミュニティ感覚の欠如や希薄さが人々の生活における最も破壊的な原動力」と指摘している。

Chipuer & Pretty(1999)は「コミュニティ感覚が人々の日常生活に密着した概念であり、行政と地域の協働に対して介入可能な方略を見出すことが課題である」ことを示している。

McMillan & Chavis(1986)は、“メンバーシップ(membership)”、“影響力(influence)”、“統合とニーズの充足(integration and fulfillment of needs)”、“情緒的結合の共有(shared emotional connection)”の4つの要素で構成される一つの概念が「コミュニティ感覚」であるとしている。

コミュニティ感覚の4つの要素については、植村(2012)および飯田(2014)を参考に以下のようにまとめた。

- ① メンバーシップ メンバーと非メンバーを分ける境界である「コミュニティの境界」、メンバーとして受容されているという「所属感」、「情緒的安心感」、コミュニティに対して貢献しようという有形・無形の「投資」の概念を含むものである。
- ② 影響力 メンバーとコミュニティが互いに影響を与え合うことを感じることで、コミュニティへの同調が生じること、コミュニティとメンバーとの互恵的関係を含むものである。
- ③ 統合とニーズの充足 自己のニーズの充足が他者のニーズの充足と結びついているという感覚が得られることである。
- ④ 情緒的結合の共有 メンバー間の精神的つながりの経験を通して、ポジティブな交流が促進され、重要な出来事や問題を共有していくことである。

このコミュニティ感覚を用いてコミュニティに関する研究が取り組まれている。例えば、コミュニティ感覚の高さが人生への満足感や主観的幸福感の高さ、孤独感の低さと関係している(笹尾ら,2007)。比較的メンバーの数が少なく小さなコミュニティでコミュニティ感覚が高い(Obst et al,2002)。コミュニティでの居住年数や関わり長さなどの時間的要因が影響している(Chavis et al, 1986)。コミュニティにおける人種・民族的状況、居住形態、所得レベル、年齢や教育歴、人格特性などに関連している(Dalton et al,2001)。

そのようななか、地域の子育て支援においてもコミュニティ感覚に関する研究が求められるであろう。

## コミュニティと社会的アイデンティティ

地域子育て支援を含めたまちづくりにおけるコミュニティの課題について、城月ら(2013)は、地域のもつアイデンティティを人と地域との心理的結びつきとし、自己の一部が結びつくことができるよう形成、醸成、維持していくことを挙げている。

コミュニティとアイデンティティの関係については、Duffy & Wong(1996)が、コミュニティ感覚を社会的アイデンティティ(social identity)に類似した概念であり、コミュニティへの所属意識(sense of belonging in the community)との互換性や、ある個人の自身のコミュニティに持っている関係の感情であると示している。

社会的アイデンティティは、Tajfel(1972)が、「ある集団に属することによって獲得される自己概念の一部であり、同時にその集団の成員としての感情や価値観をともなうもの」と定義している。

社会的アイデンティティが形成される心理的要因に「カテゴリー化」、「自己高揚の動機づけ」、「社会的比較過程」が挙げられている(Tajfel,1972、Turner,1982)。カテゴリー化は自分と同じ集団に属しているか(内集団)、自分とは異なる集団に属しているか(外集団)である。自己高揚の動機づけは積極的に行われることで内集団びいき(in-group favoritism)が起こる。社会的比較過程は自分が所属する内集団の価値を高く思うことで自身の自己高揚感や自尊心が満たされやすくなる。

また、岡本ら(2009)は、社会的アイデンティティが地域という社会的集団から獲得されるものであり、コミュニティ感覚の主要素である地域への積極的な関わり、貢献、働きかけといった行動意図を含んでいると示唆している。

## 地域子育て支援の促進に向けて

コミュニティの機能の希薄化が指摘されているなか、地域ぐるみの子育て支援の取り組みを促進するうえで保育者に期待されている役割は重要である(厚生労働省,2018、文部科学省,2018)。なお、公的制度において、保育者は乳幼児の保育に携わり、子育て支援を促進する専門職と規定している。そこで、本研究では、保育者をめざす学生のコミュニティの所属意識やコミュニティ感覚を調査し、将来の子育て支援を担う学生が、コミュニ

ティをどのように感じ、社会的集団との自身との関係でどのように認知しているかを分析する。そのことから、コミュニティ感覚と地域ぐるみの子育て支援との関連や子育て支援を促進するための課題について考察する。

## 方法

### 対象者及び時期

保育者を目指す女子大学生 484 名(A 女子大学)を対象に質問紙への回答を依頼し、回収した。回答不備等が 61 名あり、有効回答数は 423 名(有効回答率 87.40%)であった。平均年齢は 20.70 歳(標準偏差 0.46)であった。

調査時期は 2015 年から 2018 年までの 4 年間で、各年の 11 月に行った。

それぞれの年での対象者の内訳は表 1 のとおりであった。

表 1. 調査年ごとの調査対象者数等

調査年	対象者数	有効回答者数	有効回答率
2015 年	128	112	87.50
2016 年	115	98	85.22
2017 年	124	111	89.52
2018 年	117	102	87.18
合計	484	423	87.40

### 場所

愛知県内 A 女子大学講義室

### 手続き

以下のコミュニティの概要について、1 回 90 分のコミュニティ論の授業のなかで講義を行った。講義回数は 6 回であった。その後アンケートを実施した。

- ① コミュニティの語源および意味(鈴木(1986)および飯田(2014)を参考に、語源や意味として「地域」「地域社会」「共同体」、などがあることについて)
- ② コミュニティの心理学の始まり(Bennett et al,(1966)を参考に、「地域精神保健のための心理学者教育に関するボストン会議」やその時代背景について)
- ③ コミュニティの解釈(飯田(2014)を参考に、地域コミュニティ、機能的コミュニティ、関係的コミュニティについて)
- ④ コミュニティと法制度(厚生労働省(2016,2018)、文部科学省(2018)を参考に地域子育て支援事業、地域

包括支援事業、障害者相談援助基幹事業、地域幼児教育センター事業について)

- ⑤ コミュニティ感覚(飯田(2014)を参考に、コミュニティ感覚の概念および構成要素の“メンバーシップ”、“影響力”、“統合とニーズの充足”、“情緒的結合の共有”について)
- ⑥ コミュニティによってもたらされるもの(飯田(2014)を参考に、「生活の質 (quality of life、QOL)の向上」、「エンパワメント」、「ウェル・ビーイング」について)

### 調査内容

年齢、自身が所属していると思うコミュニティ、一番好きなコミュニティ、コミュニティ感覚尺度から構成された質問紙について回答を求めた。

コミュニティ感覚尺度は、McMillan & Chavis(1986)によって作成されたもので、小山ら(2002)によって日本語版が作成され、信頼性・妥当性が確認されている。この尺度は、4 つの構成要素(“メンバーシップ”、“影響力”、“統合とニーズの充足”、“情緒的結合の共有”)のそれぞれに 3 つの質問項目があり、それぞれの項目について「思わない」、「あまり思わない」、「まあ思う」、「思う」から当てはまるものに○を付け、「思わない」が 1 点、「あまり思わない」が 2 点、「まあ思う」が 3 点、「思う」が 4 点として、質問項目の回答を加算して得点化するものである<sup>(注)</sup>。

### 倫理的配慮

倫理的配慮は、日本心理臨床学会の倫理規程に基づき、「質問の回答の内容が授業の評価に関係ないこと」、「質問への回答は本人の自由意志であること」、「回答の有無にかかわらず不利益が生じないこと」、「回答の内容は統計的に処理をし、個人を特定したりすることがないこと」、「回答の内容をまとめたものは大学の報告書等に掲載すること」、「まとめた内容はコミュニティの形成に関することに寄与するために役立てること」、「質問への回答をもって同意したものとすること」、「同意しない場合は質問に回答しなくてもよいこと」、を黒板に記載した後、口頭で説明した。

### 結果

#### 自身が所属していると思っているコミュニティ

自身が所属していると思っているコミュニティは表 2

のとおりであった。一番多かったものは、「アルバイト」の 397 名(93.85%)であった。次いで、「大学」の 335 名(79.20%)、「家族」の 278 名(65.72%)、「部活・サークル」の 222 名(52.48%)であった。

表 2. 自身が所属していると思っているコミュニティ(複数回答)

コミュニティの内容	n	%
アルバイト	397	93.85
大学	335	79.20
家族	278	65.72
部活・サークル	222	52.48
友達	188	44.44
クラス・ゼミ	186	43.97
地域・地元	183	43.26
小中高校	104	24.59
SNS	85	20.09
ボランティア	73	17.26

N=423

### 所属しているコミュニティで一番好きなもの

自分が所属していると思っているコミュニティのなかで一番好きなものは、表 3 のとおりであった。一番多かったものは、「家族」の 111 名(26.24%)であった。次いで、「アルバイト」の 78 名(18.44%)、「友達」の 73 名(17.25%)、「部活・サークル」の 51 名(12.06%)、「大学」の 46 名(10.87%)であった。

表 3. 所属しているコミュニティで一番好きなもの

コミュニティの内容	n	%
家族	111	26.24
アルバイト	78	18.44
友達	73	17.25
部活・サークル	51	12.06
大学	46	10.87
クラス・ゼミ	22	5.20
地域・地元	21	4.96
ボランティア	12	2.84
小中高校	7	1.65
SNS	2	0.47

N=423

### 一番好きなコミュニティに対するコミュニティ感覚

一番好きなコミュニティに対するコミュニティ感覚については表 4 に記した。全体の平均は 12.62 (SD=1.93) であった。一番好きなコミュニティごとでは、「小中学校」(M=13.81, SD=1.18)、「部活・サークル」(M=13.37, SD=1.29)、「友達」(M=12.95, SD=1.86)、「家族」(M=12.93, SD=2.02)、「ボランティア」(M=12.89, SD=1.37)の順でコミュニティ感覚が高かった。

また、「小中高校」、「部活・サークル」、「友達」、「家族」は、それぞれ「地域・地元」より有意にコミュニティ感覚が高く、さらに、「部活・サークル」は、「アルバイト」、「大学」より有意にコミュニティ感覚は高かった(F(9,413)=5.44, p<.001)。

表 4. 一番好きなコミュニティに対するコミュニティ感覚

一番好きなコミュニティ	コミュニティ感覚	
	n	M SD
小中高校	7	13.81 1.18
部活・サークル	51	13.37 1.29
友達	73	12.95 1.86
家族	111	12.93 2.02
ボランティア	12	12.89 1.37
アルバイト	78	12.24 1.91
クラス・ゼミ	22	12.23 1.84
大学	46	11.93 1.99
地域・地元	21	11.05 1.67
SNS	2	9.50 2.59
全体	423	12.62 1.93

N=423

### 数量化Ⅲ類によるコミュニティの分類

調査対象者ごとに所属していると考えているコミュニティに「1」と、考えていないものを「0」と符号化して、数量化Ⅲ類により各コミュニティの関連を分析したところ、固定値は第 1 軸が 0.18(0≤λ≤1)、第 2 軸が 0.17(0≤λ≤1)で、この 2 軸を採用し、算出されたカテゴリースコアを表 5 に記した。

カテゴリースコアについて Ward 法によるクラスター分析を行ったところ、4 つに分類できるカテゴリー群が抽出された。1 つめのクラスターは、「家族」、「アルバイト」、「大学」、「地域・地元」から

構成され、対象者の割合は 60.5%であった。2 つめのクラスターは、「小中高校」、「部活・サークル」、「友達」、「クラス・ゼミ」から構成され、対象者の割合は 36.2%であった。3 つめのクラスターは「ボランティア」で対象者の割合は 2.8%、4 つめのクラスターは「SNS」で対象者の割合は 0.5%となっていた。

表 5. 所属していると思っているコミュニティの数量化Ⅲ類によって算出されたカテゴリースコア

所属していると思っ ているコミュニティ	第1軸	第2軸	各クラ スター
家族	-0.39	0.46	第1
アルバイト	0.07	0.12	
大学	0.08	0.19	
地域・地元	0.16	0.62	
小中高校	-0.89	-1.85	第2
部活・サークル	0.28	-0.89	
友達	-0.71	-0.69	
クラス・ゼミ	-0.45	-0.82	
ボランティア	4.82	0.10	第3
SNS	-0.93	3.69	第4

#### 数量化Ⅲ類によって算出されたサンプリングスコアの分析

数量化Ⅲ類によって算出されたサンプリングスコアについて、クラスター分析をサンプル数が大きい非階層 k-means 法により 4 つに分類し、それぞれの第1軸と第2軸の平均を分散分析したところ、有意な差があった(表6)。

#### コミュニティの所属意識におけるカテゴリースコアとサンプリングスコアの散布図

数量化Ⅲ類によって算出されたカテゴリースコアおよびクラスター分析によって得られた4つのグループのサンプリングスコアの平均値を図1のとおり2次元配置の散布図上に記した。第1グループのサンプル群は149名(35.2%)で「家族」、「アルバイト」、「大学」、「地域・地元」からなるコミュニティ群のなかに、第2グループのサンプル群は159名(37.6%)で「小中高校」、「部活・サークル」、「友達」、「クラス・ゼミ」のコミュニティ群のなかに、第3グループのサンプル群は57名(13.5%)で「家族」、「アルバイト」、「大学、地域・地元」からなるコミュニティ群と「SNS」のコミュニティの間に、第4グループのサンプル群は58名(13.7%)で「家族」、「アルバイト」、「大学」、「地域・地元」からなるコミュニティ群と「ボランティア」のコミュニティの間に布置された。

#### 4つのサンプル群のコミュニティ感覚

数量化Ⅲ類によって算出されたサンプルスコアをクラスター分析して得られた4つのグループのコミュニティ感覚は、第1グループがM=12.18、SD=1.97、第2グループがM=13.05、SD=1.81、第3グループがM=12.68、SD=1.83、第4グループがM=12.49、SD=2.00で、分散分析を行ったところ、第2グループが第1グループより有意に高かった(F(3,419)=5.55、P<0.001)。

#### 好きなコミュニティと4つのグループとの関係

好きなコミュニティと4つのグループとのクロス表を表7のとおり記した。

「家族」、「アルバイト」、「大学」、「地域・地域」を好きなコミュニティに挙げている第1クラスターでは、42.2%が第1グループ、29.3%が第2グループ、14.8%

表 6. 数量化Ⅲ類によって算出されたサンプリングスコアおよびクラスター分析結果

	第1グループ (n=149)		第2グループ (n=159)		第3グループ (n=57)		第4グループ (n=58)		F(3,419)
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
第1軸	-0.15	0.41	-0.38	0.41	-0.57	0.58	2.31	1.16	349.35*** 4>1>2>3
第2軸	0.27	0.24	0.34	-0.85	1.88	0.59	0.00	0.77	510.95*** 3>2>1>4

\*\*\*p<0.001

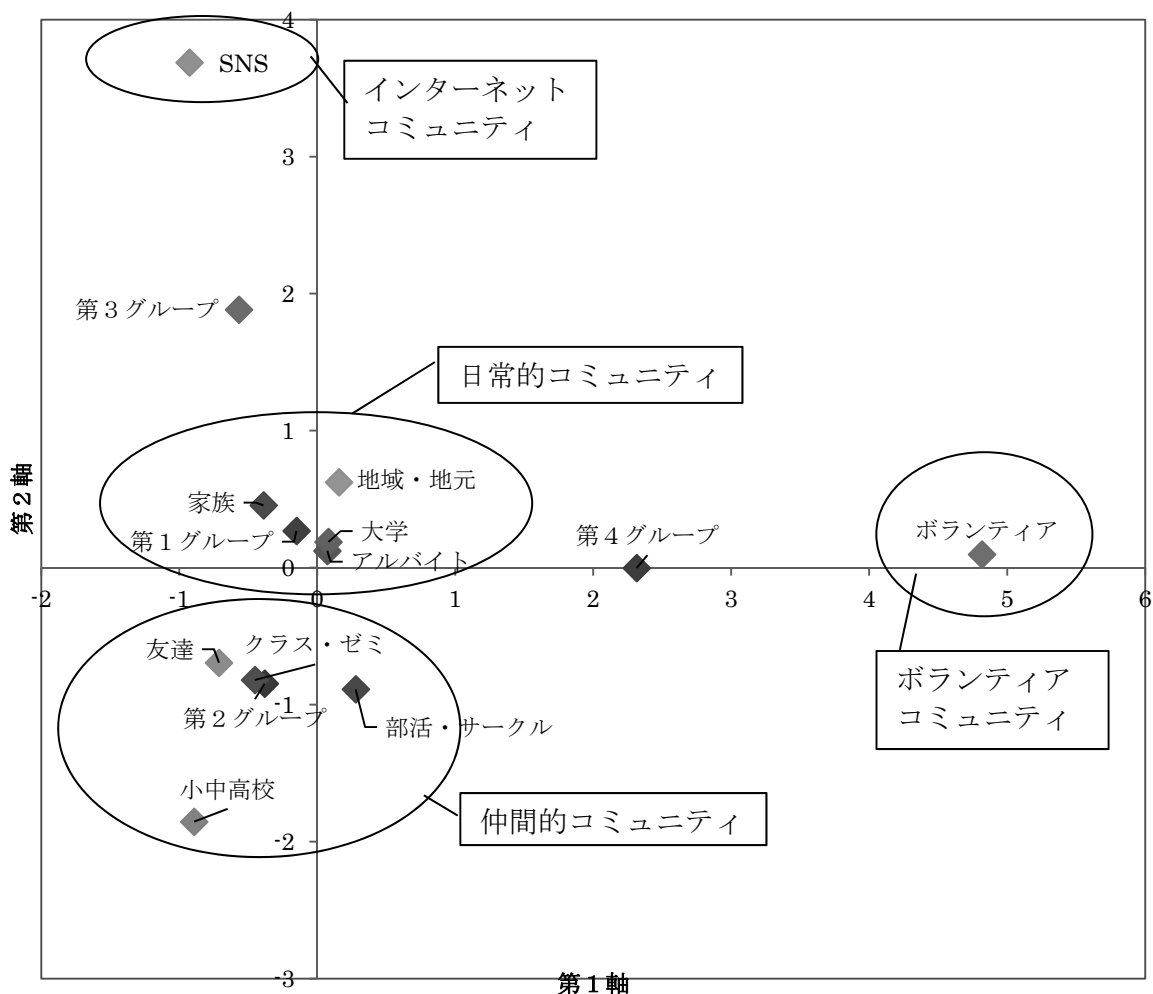


図1. コミュニティの所属意識におけるカテゴリースコアとサンプリングスコアの散布図

表7. 好きなコミュニティとサンプリングスコアにおける4つのグループのクロス表

クラスター	好きなコミュニティ	第1 グループ	第2 グループ	第3 グループ	第4 グループ
第1	家族	44	32	18	17
	アルバイト	25	28	13	12
	大学	27	10	5	4
	地域・地元	12	5	2	2
第2	小中高校	1	5	0	1
	部活・サークル	11	27	7	6
	友達	21	41	8	3
	クラス・ゼミ	8	10	2	2
第3	ボランティア	0	1	0	11
第4	SNS	0	0	2	0

$\chi^2=118.96$   $df=27$  \*\*\* $p<0.001$   $N=423$

が第3グループ、13.7%が第4グループに分類された。第2クラスターの「小中高校」、「部活・サークル」、「友達」、「クラス・ゼミ」では、第2グループに54.2%と多く、第1グループが26.8%、第3グループが11.1%、第4グループが7.9%となっていた。第3クラスターの「ボランティア」は第4グループに91.7%、第4クラスターの「SNS」は第3グループに100%と分類された。

## 考察

### コミュニティへの所属意識

保育者を目指す女子大学生は、主に「アルバイト」、「大学」、「家族」、「部活・サークル」というコミュニティに所属しているというものであった。数量化Ⅲ類およびクラスター分析により各コミュニティの関連を分析した結果では、「アルバイト」、「大学」、「家族」が第1クラスターに属しており、「部活・サークル」は第2クラスターに属していた。この第1クラスターは女子大学生の日常生活におけるものと考えられることから「日常的コミュニティ」と命名することとした。「部活・サークル」は「小中高校」、「友達」、「クラス・ゼミ」のコミュニティ群のなかにあるところから「仲間的コミュニティ」と命名することとした。このなかで「小中高校」はそのものに現時点で関わっているというよりはその当時の仲間関係が現在も続いており、そのことにコミュニティとしての意識を持っていると推測されることから、第2クラスターは「仲間的コミュニティ」とすることが適当と考えた。なお、第3クラスターは「ボランティア」だけであったことから「ボランティアコミュニティ」と命名した。第4クラスターはインターネットを利用した「SNS」だけであったことから、「インターネットコミュニティ」と命名した。

数量化Ⅲ類によって得られたサンプルスコアをクラスター分析した結果では、第1グループのサンプル群は、「日常的コミュニティ」のなかにあることから、日常生活のなかでの集団にコミュニティの所属意識を主に持っていることが推測された。「日常的コミュニティ」に所属意識を持つ女子大学生は約3割以上となっていた。第2グループのサンプル群は、「仲間的コミュニティ」のなかにあることから、仲間意識がある集団というコミュニティに所属意識を主に持っていることが推測された。「仲間的コミュニティ」に所属意識を持つ女子大学生は約4割いると考えられた。第3グループのサンプル群は、「インターネットコミュニティ」と「日常的コミュニティ」の間にある

ことから、その両方に所属意識を持っていることが推測された。そのような所属意識を持つ女子大学生は約1割となっていた。第4グループのサンプル群は、「ボランティアコミュニティ」と「日常的コミュニティ」の間にあることから、その両方に所属意識を主に持っていることが推測され、女子大学生の約1割となっていた。

4つのグループのコミュニティ感覚については、「仲間的コミュニティ」への所属意識が主である第1グループのコミュニティ感覚が一番高く、「日常的コミュニティ」への所属意識が主である第2グループが一番低かった。コミュニティ感覚は「仲間的コミュニティ」、「インターネットコミュニティ」、「ボランティアコミュニティ」、「日常的コミュニティ」のそれぞれを主にして所属意識を持っている順に低くなると推測される。

### 好きと思うコミュニティへの意識

自分が所属していると思っているコミュニティのなかで一番好きなものは、「家族」、「アルバイト」、「友達」、「部活・サークル」、「大学」が主なものであったが、一番好きなコミュニティへのコミュニティ感覚が高かったものは、「小中学校」、「部活・サークル」、「友達」、「家族」、「ボランティア」であった。それらに対してコミュニティ感覚が低かったものは「SNS」であった。このことから、「日常的コミュニティ」を好きと想着いてもコミュニティ感覚は「インターネットコミュニティ」以外のコミュニティよりも低いということが考えられた。また、「インターネットコミュニティ」として「SNS」が一番好きなものとしている場合はコミュニティ感覚が低いということも推測される。そして、「仲間的コミュニティ」を好きと想着いるもののコミュニティ感覚が高いということがうかがわれた。

しかし、「仲間的コミュニティ」や「日常的コミュニティ」に属しているものの多くが、互いのコミュニティに所属していたり、また、「ボランティアコミュニティ」や「インターネットコミュニティ」にも所属していると考えていることから、好きと想着いるコミュニティへのコミュニティ感覚が社会的アイデンティティとして自己の存在を確認できるものとしていることが推測される。一方で、幾つかのコミュニティに所属していることから、階層的にコミュニティに所属している現状が把握できるであろう。

このようなことから、数量化Ⅲ類によって採用した第1軸は「日常的コミュニティ」においても「ボランティ

アコミュニティ」においても「外的」への機能的なつながりを表していると考えられ、「機能」軸と命名できると推測される。

第2軸は「仲間的コミュニティ」を情緒的な関係として、「インターネットコミュニティ」を仮想的関係として想定すると、自身の集団への「関係」を表していると考えられ、「関係」軸と命名できると推測される。

そして、この2軸は、それぞれ関係的コミュニティと機能的コミュニティという2次元として交差するなかで、階層的にコミュニティへの所属意識を持っていることを説明していると推測できるであろう。

### 機能的コミュニティと関係的コミュニティ

機能的コミュニティおよび関係的コミュニティについては、飯田(2014)が先行研究のレビューから以下のようにまとめられている。

機能的コミュニティとは、特定の関心についての何らかのアイデンティティの意識に基づいたもので、社会システムである家族、学校、職場集団、公共の組織などだけでなく、社会システム間の目に見えないネットワークなどを指している。関係的コミュニティは、生活する人々にとって共通の規範や価値、関心、目標、同一視と信頼の感情を共有している心理社会的な場のコミュニティである。また、関係的コミュニティは、そこで行われている相互作用に実践的に介入して行くことが可能な機能的コミュニティでもある。

本研究において、数量化Ⅲ類によって採用した2軸が「機能」軸と「関係」軸であり、その軸に交差するように「仲間的コミュニティ」、「日常的コミュニティ」、「ボランティアコミュニティ」、「インターネットコミュニティ」に対して、調査対象者は階層的に所属意識を持っていることが考えられた。つまり、「日常的コミュニティ」、「ボランティアコミュニティ」は、社会システムである家族、学校、公的組織としての機能的コミュニティであり、「仲間的コミュニティ」、「インターネットコミュニティ」は、共通の価値、関心、目標、同一視と信頼の感情を共有している関係的コミュニティということである。一方で、「仲間的コミュニティ」、「日常的コミュニティ」、「ボランティアコミュニティ」、「インターネットコミュニティ」のコミュニティ感覚が高いことは、地域から獲得されるものとしての社会的アイデンティティよりも特定の個人の関心についてのアイデンティティが影響していることを示唆しているであろう。そのことは、自己の

高揚感や自尊心を満たす集団を所属意識が持てるコミュニティとして評価しているということがうかがわれる。

### コミュニティ感覚と社会的アイデンティティ

Turner(1982)は、自己カテゴリー化理論 (self-categorization theory) によって、ある個人がどのような集団に属しているかを階層構造によって説明している。この理論によると、外集団の人間と自己との違いを際立たせ、内集団の人間と自己との類似性を明確にする集団が、社会的アイデンティティとして活性化しやすい集団となる。

この自己カテゴリー化理論から本研究の結果を捉え直すと、「仲間的コミュニティ」では、コミュニティ感覚が高いので、外集団の人間と自己との違いを際立たせ、内集団の人間と自己との類似性を明確にして、社会的アイデンティティが活性化されており、また、このコミュニティは関係的コミュニティであるため、共通の規範や価値、関心、目標、同一視と信頼の感情を共有している心理社会的な場となっていることから、自己の高揚感や自尊心を満たすということに作用していると推測される。つまり、社会的アイデンティティは、コミュニティ感覚が「地域への積極的な関わりや貢献や働きかけといった行動意図に機能している」(岡本ら,2009)ということよりも、「それぞれ個人の共通の価値、関心、信頼の感情の共有という関係的なものに作用している」ことがうかがわれる。

一方、機能的コミュニティとしての「日常的コミュニティ」は、「仲間的コミュニティ」よりもコミュニティ感覚が低かったことから、同様に社会的アイデンティティも活性化の度合いが低いことが推測される。つまり、機能的コミュニティという社会システムへのコミュニティ感覚が、関係性コミュニティという個々の心理社会的場のよりも低いということである。言い換えれば、社会的アイデンティティが自己の高揚感や自尊心を満たす内集団に対して活性化されていると考えることができるであろう。それは、本研究における保育者を指すものが、地域への積極的な関わりや貢献や働きかけといった行動によりも、集団と個人とのつながりについての認知的所属意識(Hinkle et al, 1989)や情緒的な絆としての情緒的所属意識(Hinkle et al, 1989)において、自己のアイデンティティの確立に影響しているかどうか、コミュニティ感覚を評価する基準になっていると思われる。



## 地域子育て支援の促進の向けて

保育者を目指すもののコミュニティ感覚は、それぞれの自己のアイデンティティに関連したものかどうかによって、社会的アイデンティティを活性化させていることが推測される。そうであれば、コミュニティによって得られるものとしての、強さとコンピテンス（有能さ）の協調、エンパワメント、社会変革といったもの(Duffy & Wong,1996)、個人の幸福、社会的公正、市民参加、人の多様性の尊重といったもの(Dalton et al,2001)、への期待について、どのように考えればいいのかということが課題になる。そのことに対しては、コミュニティにおける地域子育て支援に求められていることへのアプローチが不足していると認識し、どう取り組んでいくかについて、具体的な方略を明示する必要がある。

そこで、保育者を目指す場合、子育てのコミュニティに関わることに自己のアイデンティティを重ねて見つめ直し、今、子育てに求められている課題を自身の課題として受け止められる経験が必要になっていると考えられる。そのためには、まず、保育者を目指す過程のなかで、子育てをめぐるコミュニティに参加する経験を多く持つことによって、コミュニティの意識を再構築することである。そのうえで自身のコミュニティへの所属意識とコミュニティ感覚を評価し、地域に積極的に関わり貢献していくという社会的アイデンティティを機能させていくことの実感を理解していくことである。そのような経験は、コミュニティの所属意識をコミュニティ感覚の形成につなげていくものであろう。保育者も目指すものは、地域の子育て支援の活動のなかで社会的アイデンティティを形成していく過程を通して、コミュニティ感覚による地域子育て支援を促進されていくことが求められると考える。

## 今後の課題

コミュニティの所属意識によってコミュニティ感覚の程度が関係しており、その要因として機能的と関係的との2軸が挙げられ、階層的に幾つかのコミュニティへの所属意識を持っていることが示唆されたが、コミュニティ感覚の4つの要素とそれぞれ機能的および関係的コミュニティとどのように作用しているのかは、本研究では明らかにできなかった。また、そのことに関連して、コミュニティ感覚の4つの要素がそれぞれ社会的アイデンティティにどのように関係しているのかも明らかにできなかった。それらの関係を明らかにできれば、コミュニ

ティとして得られるものへのアプローチについて具体的な方略が明示できるであろう。そのために、今後は、基礎的なコミュニティ感覚の4つの要素と他の所属意識に関する理論の構成概念について、階層的な関係を分析していく研究が必要である。さらに、分析によって得られた知見を地域のコミュニティ活動に取り入れ、分析結果の実証研究を同時に行っていくことも重要である。

## 注

SENSE OF COMMUNITY INDEX は SENSE OF COMMUNITY INDEX II (Chavis et al.,2008)に改訂され、妥当性・信頼性に関する研究が行われているところで、これまでの研究の多くが SENSE OF COMMUNITY INDEX によっていることから、本研究においてはこの尺度の日本版を使用することとした。

## 引用文献

- 安藤延男, (2002) 家庭・学校・地域の機能不全を『治す』—教育コミュニティ心理学の視点から(思春期・青年期における心身医学と教育の関わり), 心身医学 42(1), 55-60.
- Bennett, C.C., Anderson, L, S., Cooper, S., Hassol, L., Klein, D.C., & Rosenblum, G. (Eds.), (1966) Community Psychology : A report of the Boston conference on the education of psychologists for community mental health, Boston University Press.
- Chavis, D.M., Hogge, J.H., McMillan, D.W., & Wandersman, A., (1986) Sense of community through Brunswik's lens : A first look. Journal of Community psychology, 14 (1), 24-40.
- Chavis, D.M., Lee, K.S., & Acosta, J.D., (2008) The sense of community (SCI) revised: The reliability and validity of the SCI-2, Paper presented at the 2nd International Community Psychology Conference Lisboa, Portugal.
- Chipuer M. H., & Pretty G. M. H., (1999) A review of the sense of community index: Current uses, factor structure, reliability, and further development, Journal of Community Psychology 27(6), 643-658.
- Dalton, J.H., Elias, M.J., & Wandersman, A., (2001) Community Psychology : Linking individuals and communities. Wadsworth
- Duffy K. G., & Wong F. Y., (1996) Community psychology. Boston : ALLyn and Bacon. (植村勝彦 (監訳), (1999) コミュニティ心理学 ; 社会問題への理解と

- 援助 (ナカニシヤ出版) . .
- Hinkle S., Taylor L. A., Fox-Cardamone D. L., & Crook K. F., (1989) Intragroup identification and intergroup differentiation : A multicomponent approach, *British Journal of Social Psychology* 28(4), 305-317.
- 飯田香織, (2014) コミュニティ心理学におけるコミュニティの定義とコミュニティ心理学の独自性, 立命館産業社会論集 49(3), 79-99.
- 小山梓・池田満・笹尾敏明,(2002) 日本語版「コミュニティ感覚」尺度(ICU・SOC Scale)作成の試み：マイクロ・マクロ・レベルアプローチ, 日本コミュニティ心理学会第6回大会発表論文集 54-55.
- 厚生労働省, (2016) 厚生労働白書(平成 28 年版)ー人口高齢化を乗り越える社会モデルを考える 日経印刷.
- 厚生労働省, (2017) 厚生労働白書(平成 29 年版)ー社会保障と経済成長 日経印刷.
- 厚生労働省, (2018) 保育所保育指針解説 フレーベル館.
- McMillan D. W., & Chavis D. M., (1986) Sense of community: A definition and theory, *Journal of Community Psychology* 14(1), 6-23.
- 文部科学省, (2018) 幼稚園教育要領解説 フレーベル館.
- 内閣府, (2018) 少子化社会対策白書(平成 30 年版) 日経印刷.
- Obst, P., Smith, S., & Zinkiewicz, L., (2002) An exploration of sense of community, part Dimensions and predictors of psychological sense of community in geographical communities, *Journal of Community Psychology* 30(1), 119-133.
- 岡本卓也・林幸史・藤原武弘, (2009) 写真投影法による所属大学への社会的アイデンティティの測定, 行動計量学 36(1), 1-14.
- 大鐘啓伸, (2010) 児童センターにおける子育て支援, 臨床発達心理士会第6回全国大会発表抄録集 66-67.
- Sarason S. B., (1974) *The Psychological Sense of Community: Prospects for a community psychology.* Jossey-Bass.
- 笹尾敏明・渡辺直登 (2007) コミュニティ心理学の誕生から現在まで, コミュニティ心理学ハンドブック 東京大学出版会, 4-19.
- 城月雅大・園田美保・大槻知史・呉宣児, (2013) 「まちづくり心理学」創出に向けた基礎理論の構築ー都市計画論と環境心理学の橋渡しによる地域再生のためにー, 名古屋外語大学現代国際学部紀要 9, 31-47.
- Tajfel H., (1972) *Social categorization* English manuscript of *La catégorization sociale*, In S., Moscovici(Ed.), *Introduction á la psychologie sociale.* Vol1, Paris ; Larousse.
- 滝澤武・横山明子・伊藤和也・古玉佐知子・池田美千代, (2012) コミュニティ心理学からみるQOLを高める学生相談活動ー帝京大学宇都宮キャンパスの取り組みと課題ー, 帝京大学学生カウンセリング研究 創刊, 45-50.
- Turner J. C., (1982) *Towards a cognitive redefinition of the social group.* In: H., Tajfel (Ed.), *Social identity and intergroup relations.* Cambridge University Press.
- 植村勝彦, (2012) 現代コミュニティ心理学 理論と展開 東京大学出版会.

## The Sense of Belonging to the Community of Female University Students

### Aiming for Nursery Teachers

### The Relationship between a Sense of Community

### and a Sense of Belonging

OGANE Hironobu

Department of Psychology, Faculty Human Relations, Tokaigakuin University

OGANE Kaname

Department of Childhood Education, Faculty Literature, Nagoya Women's University

Abstract

The function of the community is diluted. Therefore community child care support project is carried out in a public system. So, the role of nursery teachers in the public system is important. In this study, I investigated sense of belonging to the community and sense of community to 484 female university students to be nursery teachers. And I considered a necessary thing for the nursery teachers' training to promote of community child care support. The result, the sense of belonging to the community were categorized in "congenial community"(36.2%), "daily life community"(60.5%), "volunteer community"(2.8%), "internet community"(0.5%) by quantification III and cluster analysis. "The congenial community"(M=13.05, SD=1.81) which was the place of individual psychological joint ownership than "the daily life community"(M=12.18, SD=1.97) as the social system was higher sense of community. From these, it considered that students aiming for nursery teaches had to experience community child care support activities. Such the experience will enhance their sense of community. And they will form the social identity in conjunction with the action for community contribution by sense of community.

Keywords: sense of community, social identity, child care support, relational community, functional community